

観光立国の実現は、地方(地域)から

# 女将が見た震災被災地

## 日本旅館国際女将会、南三陸へ

# 自然の力の大きさに、「減災」への思い新たに

日本旅館国際女将会(須賀紀子会長、35会員)は11年12月6、7の両日、同会員の阿部恵子さんが女将を務める南三陸ホテル観洋(宮城県南三陸町)で研修を行った。研修は6日定例会と勉強会、7日の現地視察で構成。6日の勉強会では阿部さんから被災当時の状況や町の旅館の役割などについて講話があった。

翌7日は町役場の防災対策庁舎や志津川漁港、また高台にあったため津波を免れた産産団地のほか、小学校の校舎を残してほとんどの建物が失われた戸倉地区をバスで訪れ、津波の威力の恐ろしさを目の当たりにした。

視察には、震災前から南三陸の観光ボランティアガイドとしてガイドに携わってきた後藤一磨さんが同行した。後藤さんは震災体験を語るプロジェクト「語り部プロジェクト」の一員として、自らの被災体験や震災前の

町の様子、震災に対する思いなどを語ってきた。町の中心部の大きなガレキなどは一カ所に集積されているが、「きれいになるほど家の基礎があらわになり、せつなくなる」と後藤さん。後藤さんは、土地使用制限などの問題から津波に遭った地域に病院も商店もないことや、船を失った漁師の状況、また町役場の多くの職員が命を落とし行政機能が不全になっていることなど、被災地が置かれている現状を、いかに説明した。

後藤さんは「人がなくなった場所を見に行くのははばかられると思うでしょうが、現場で起きたことを自分のこととして来てる下さるのを歓迎したい。『防災』よりもいかに被害を小さくするかという『減災』の考え方を持っていてほしい。日頃の十分な備えが大事だ」ということを、来ることで認識してもらおうと切実な思いを強調した。

志津川漁港の付近には津波で破損した漁船の残骸が大量に積み上げられた。しかし岸壁では漁家の作業する姿が見られる。右奥に見えるのは、南三陸ホテル観洋



南三陸ホテル観洋に集まった日本旅館国際女将会のメンバーら。同館の女将 阿部恵子さん(写真後列右)の話聞いた



「語り部ガイド」の後藤一磨さんから震災当日の被災体験や復興の状況などの話を聞きながら、町内を視察



ガレキが転がる町内だが、故郷の復興に向けた力強い言葉がそこかしこに掲げられている



南三陸と気仙沼を結んでいたJR気仙沼線だが、線路は流され復旧のメドは立たない



一連の震災報道で全国に知られるようになった、南三陸町役場防災対策庁舎。ガレキは取り除かれたが、曲がった鉄筋は津波の恐ろしさを伝えている



間近で見る被災地の状況に衝撃を受け、参加者は一様に硬い表情となった。町内には同様に視察に来た団体のバスも見受けられた



戸倉地区の戸倉小学校。津波に洗われた校舎の前、校庭には建物の2階分の高さにもなるようなガレキの山ができてあがっていた



戸倉地区は戸倉小学校の校舎を残してほぼ一面の荒地。その中でチリ地震津波(1960年)の津波の高さを示した標識が辛うじて残されていた



9カ月経っても未だアパートの屋根にはガレキが残ったまま。その手前では多くのボランティアの人がガレキ撤去に従事していた